小柴之雪　一

内務省圖書
第　號
書部　類
函
冊　共四

書門　類
三四四號
九〇函
八架
四冊

内閣文庫
和書　類
二七三四四號
四冊
五四函
一九架
384

内閣文庫
番號　和　27344
冊數　4（1）
函號　154 384

国立公文書館
National Archives of Japan

木葉の雪の序

鶯蛙のひあそびしくゑ子なりつ始りもるとい
やまとうた書の難波津の浅代四十六字の
くさはよみなれたる歌なりけるをよりもかのゆきや波
藪佐和家(ヤブサワケ)みさしよみくる作そ八雲のたぐ
ゐにかみあり詠ぐる浅にともなりてまいりよりてにの
らぬいふ万葉集十七巻に大伴家持卿(マヘツキミ)越中守
にくかしきよ河あて矢形尾の大黒といふたかの

うちしき山田史三方麿のあそむかのつゝきさぬく
んゝを浮く神またいのあそむゝかしく清範よ射の歌
吉江の村よさまぬら作ゆゑるみゆ歌と歌文才九出きよ
白記大齋宮哉よあまゝく石瀬野よ馬たたゆきて
あそむともに人孫つまあるまいとおもふみかまき旋歌也
古今集にまて鶴ゝをみれきゝつめよ前のらん浮橋
よまよまゝ芹川の代のさえ拾遺集よは齋宮綱の
すまぬまいれぬよあまやあまも後拾遺集よわ好結

集にもふは齋宮将子歌よすくなく无の筆よ入れり、
猶さらよ與齋宮の一百首は鶴の本よ乃ゑ草子ともよみ
こゝめある歌ともまく共の筆よよみあらはさんであ
やしく力者くのたきむかの多人のるをとうすれ起
まする人々はさらまれば恐すこ世の齋宮個人かふかと
の井また人ある人はこの術くとえぬゆゑよしきら歯
ほしくまするれおもひのかくれ代た梓弓ひき豊國乃
末遠く浮まくまここの奥平の大徳みつのうも河

これを考へあきらむるすのあまりのうへに世にこれかれ
に波多野翁の御物語にかの御説(トキコト)あるはさらにめでたく
のれ思へらくはまた思ひおこしたまへる大人の御こゝろも
はかるこゝろなくて書きてんには阿彌古(アヒコ)の忠(マメワサ)も見ゆる
海しく翁のいさをもみちたる道の大人のいさをのかたみに
つたへおはしけるなれば此しるしふみのまへにすゑおきて
おのおのさらにめでたしとおもふやうなれどかきそへたる
のはしに書そへたる

本居大平

木柴の雪一の巻　定家卿鷹三百五十四首之解

上野介藤原重名釋

○春　三十八首

あらたまのとしたちかへしその雪まもえて木ねとる鷹の鈴やなるらむ

古註に雪まもえてのて文字濁りてよむべしと云さもあるべし扨此古註と云ハ寛永十三年の奥書ありて名も誰とも志るさゞれバいづれの世のいかなる人の書るにや註としも出て明らかに解しかねたる所あれど或ハ義なし可尋又ハ不知とのミ書しも又多しあらたまハ年と云冠辞なり冠辞考にくハし依て略きていはず下皆志るさず　たちかへるハ木柴にて鷹の来り居るを

雪をいふ本居ハその鷹の木の枝にとまり居るを云（そは
よりおのれが居べき枝をさだめてとまらむとする故本居と云也
いふ也此哥も此集の巻頭におかれたれバなり　其意ハ
よみてかのゆるゝものゝのびやかによみ出したる秋ハ
暮て年ハ越ると云事のやがて今年に立かへり来たる也を
うけたるハなしなどいひ春の初ハ詮をなすとせしや
とられたるに越て来れども本柴の名のまゝきこえぞて
まことにきに鷹の本名となしたる本柴に来り居し詠哥
雪をふらさむとの也　本居大事云此哥春ハ来たるよしを
見せむとよめらむ本は雪消てので文字などもぞ清く

よりて雪ハふりかゝる本柴に鷹の来りて本居
となりそのむ鷹ハ雪にとゆりたる跡がきゆるが即本
柴の雪ハ消たる也成べし其詠のこゝろるが文即年ハ
来たるなりしと云べきか雪消てと云が鷹のとまりたる
詠のつゞきなる也一つ事や此例をいはゞ
金葉集 秋 夕されバ門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞふく
千載集 秋 あさもよむ野路の玉川萩こえて色なる浪に月やどりけり
風雅集 風吹ハ波こそぬれも岩越て川せハ花のなるかみ
此外なとも多く見えて三ノ句ノて文字なりて後ありくと云なハ
あらそて下ノ句にいへる稲葉の音づれるが即秋風のふく事なりて

皆此例也但此歌の心詠でこえたるとハなくてあとやうら
らむと疑ひていひつたふるハ揺る萩すゝきの類とハことなく
鷹の木居となれる眼前にみゆる景ハあらでたゞちや
あるらむと思ひやりていひたるにてよみなしたる事成べし
かく思ひ得るも一説といふべきか

雪をうちはらひつゝ狩にかけ落し草の原鷹は七顧の絵
古注に諏訪の御狩に待鷹と云事有と云て七鷹
合て七すゞ合せる事をしらしく解り鷹百首 龍山公 給
折入て七さとる鷹に継て御やあしとうたにある歌のへ此ぞれ此歌の
注に深かくる鷹のふるまひとあれハ草の鷹のすく引合て

うるべしさて此鷹の事に諏訪の大御神の事を云此故事
未詳 延喜式神祇十神名帳下 信濃國諏訪郡二座 並大
南方刀美神社と出て健南方命を祭るよりて鷹に
縁有事をきかず是ハ中古佛家にて惣て神に本地と
云ものをたてゝ天竺の遠き佛と皇朝の諸神を習合て
彼諏訪の二宮をも下の御社を不動毘沙門上ハ観音
普賢これの四佛をあて二大御神の本地とし給ふ又
四佛の徳をもて鷹の徳に合せて下の御社ハ小鷹上ハ
大鷹とさへ比てよりやがて鷹を四佛ともいふよし的て
鷹をかく云事ハ田園にある五穀をとるも不食してこれを

そこなふ鳥どもをとればおのづから此四佛の徳を備へる也
鷹匠を加へて五佛と云よしもきけどそれ家々その道々
ゆゑくいひたるは皆強言成べし鷹のことは惣論ならずして新
修鷹経序又新増鷹鶻方春秋運斗樞古樂府白
鷹記等の和漢の正しき書に出しぞよりためしきさらく
かけ落しけるけを惣て鷹の鳥を捉をかゝると云下々より
ちらしく落しき也先古語によるべきは鷹の書に八鈴七嶺
隔て見えたる事もいひ尚末にいたりしくあるを又平らの
鷹の故事どもいへれどいづれも詳ならず草取と云詞も
古くは萬葉集十巻に月夜(ツキヨ)吉(ヨミ)鳴(ナク)霍公鳥(ホトヽキス)欲見(ミカホシミ)吾(ワレ)草(クサ)

取有(トレリ)見人(ミルヒト)毛(モ)欲得(カモ)と出て同十九巻にも此詞出たり永久四年
百首（世に堀川次郎百首と云）にも鈴むしの声を強りけるかり
ふさとる鷹ぞ思ひしるを又正治二年の百首にも雉子
をむかれのくられけらひたかく若鶏鷹の音こそこゆや
新六帖光俊朝臣の哥にも若夜太とよめり是れ若夜
鷹まだ鳥をうけて落て若むしの中にかくその鳥を捉事
なるも雛の事ま雪けむし消る春の野に出て若菜ハ
つまぐ鷹を合せて雛などもつ取るさまをいへるなり
又鷹狩に雉兎をとりてかへるの鳥と云事ハ皇朝鷹狩の
始の得ものを雉なれバ成べし要くさて下に云べし鷹に

諏訪の御神ハ由縁あるに依て戎人ありといへハ
考をも云其説に云平家物語志渡合戦の條にいはく
神功皇后新羅を攻させ給ひし時伊勢太神宮より
二神荒御前をそへさせ給ひたり二神御船の艫舳に
立て新羅を安く攻させかへさせ給ひぬかくも異國の軍を
志りぞけさせ給ひて帰朝の後一神ハ津國住吉郡に
とゞまらせおハしまし今一神ハ信濃國諏訪郡にとゞま
らる諏訪大明神の御事也とあるく是全くたゞく信へる
事ありて云ひしものなるべしされバ鷹狩も軍陣の調
練を本として高貴勇猛の人これをなし給ふるぞかく

住吉の大御神ハ海路の軍を守り給ふ神にして諏訪の
大御神ハ陸路の軍神なる故なりて鷹に故ある事なり海
なき國も多かれと其中に信濃國ハ殊に大國にして
又さらに海もなき國なれバ上代より山野の狩獵を
専としく軍陣調練の為に陸路の軍神在す國なれバ
かゞく狩に故あると知べし又諏訪宮なる祭なる外の神なる
祭と違ひて鳥獣なるそなへとの有事ハ全く狩獵を
司るよ神と知べき事なれ合せべし彼むかし神功
皇后の祭り給ひし故事よりも海なき國なるなりより
つきてやがて鷹の神と崇めまつるを中古より僧徒

かの本地と云事どもとり合せて鷹の神といひし事あ
げし重名云此説遠に似たれども彼四佛に鷹匠を加へて
五佛と云説よりもよりところあるさまに思はるる故に鷹狩を
武士のなせる事ハ先ツ軍の調練又山川の地理を志るす
爲又所の名を志らしむるため且ハ其人歩立の駿足を
試る爲にいたるまで全く治世に亂世を忘れざる武
士のなすべき道成べしその理あればこそ鷹狩の得物の
有無をもて其日の勝負とさへいふ也日本書紀神功
皇后御巻曰先日教天皇者誰神也願欲知其名建
七日七夜乃答曰神風伊勢國之百傳度逢縣之

拆鈴五十鈴宮所居神（中略）答曰於天事代於虚事代
玉籤入彦嚴事代神（中略）神名表筒男中筒男底筒
男神（中略）時得神語隨教而祭然後遣吉備臣祖鴨
別令擊熊襲國（下略）此文を考るにかの平家物語にいへる
事ハおくより出し事成べし又諏訪の御神のより
處ハ大物主の神の御子健御名刀命諏訪郡にの
がれ玉ひ彼國に祭られて諏訪大神とハ申奉る
旧事紀曰（此書ハ後人加筆多くして信用しがたき書といへども本より古書なれバ全くハ捨べからず）健御名
刀命逃至信濃國諏訪郡請降曰乞以諏訪郡為大
己貴之讓為我有然則不逆天孫之命（下略）此文等かく

こゝに考るに大物主神ハ大己貴命の御子とし此御神神代より武き御神にまし〳〵て彼所に云日本書紀に出る於天事代於虚事代と申奉りしも此御神等の御事なく平家物語なども此事とも傳へて流らし事とあかる依て武猛の神にましませバ或人の云説も擾なきにあらざるべし此集の末に吉備津御神の贄鷹の事をよみたる此事詳ならね是も神功皇后の御巻に吉備臣祖鴨別と云人をつかはし給ひて熊襲の國をうたせ給ふよし見え若かるゝより中むかしの頃まで八五六百年今の書にあらぬとりくの傳へありて世の人も

知又歌をもよみし事成べし又或人云肥前國松浦郡濱崎と云村に古く諏訪神を祭りて里の産社とも此宮の社傳に云いにしへ神功皇后三韓を征給ひし時同國玉島の里に住吉の神を齋祭り給ひ此濱崎の里に諏訪の神を祭賜ひて海陸の軍神に崇ませんとて二神をこの二里にいつきまつり給ひて御霊をいのり給ふ後より三韓の中なる百濟國より此故をきゝて濱崎にまうで給ふ諏訪の大神に鷹二もとをまゐりて御社の邊りに在しに一日蛇此鷹にまざりひしく給に鷹死ぬ大神大に怒り給ひて今にいたるまで此里に蛇の類住ずなりし今

遠近の里人これ浜崎の宮にまうでゝ此宮居の神哉
とて蛇まむしの禍を除く守りとまうし顕然神霊
衆人の知る所也毎年冬の祭礼此故事をしるく神
輿の左右に木製の鷹二ツをすゑを据く所もにさらに
此事正しき伝記にいでずといへども今見る所の神霊
うたがひなきなりまた群参く諸人の仰き尊む事なく
またしらぬ鷹につきある由緒の一説としべきある諏訪の
神とうへいへど信濃國を云く遍く人の知る所なれども
かゝる事そいづまさりといづれか未とも云がたかるべし
此事近日君侯に重名をうえおもゝく或人の次の事を

かの國なる正しき證しにもあらぬ事なれバ彼所をもとより
知らせざる事と成ぬ依て諏訪の神を鷹の神と仰く
故の一説としてこゝに志るもの也又或鷹書に大鷹ハ
鹿島 鷂ハ熱田 雀隼(サシバ)ハ住吉 隼ハ諏訪 などゝ此四神の守りとを
引出くかけも又或鷹書に鷹野なる所の呪文をとなふる
其中に諏訪住吉の神の御名あるは又八幡霊鳥鷹など
云事もこれあれを彼筑前に伝へし三韓征伐の故事なる
よしあるものに出ゆ引合せ考へるに無き事とても也
さらく七嶺の鈴此事した写本の証によれバ鷹人
多く出くこれらハ将をるゝ事もあるべきかる又七並と云名

処もあれども鈴附のあたりなれバ七翼七鷹など云て
七品の征鳥七曜七政と云事もあれども此方にとりて
今くもきこえざれバ只七の數鷹に由縁あるやう
あもしきゆ七瀬を信濃の國の地名などゝ申てあり
むやまさく問べき事と君侯も云又或鷹書に狩場の
七草と云るもみえ七種の鷹の藥草と云るもある業
かたく七の詞よしある事なるべし
信保州の主とおほせる鷹なれや柳のみ乃そろゝそある
古註に柳水可尋と云て詳ならぬかや鷹の名而中を
かゝるゆゑハ覚えバ鷹の藥に柳のみをもうし薬に用る

事ハ業柳の露ぬれしてども又朽木に濡れるふありとハふ
かゝる事ハあれバとり合せて讀ならし成べしひきあて
咽の毛みくらけるひの下にあれ古註に鷹のふくろぐ（伏）時
肩より赤き毛をおきを翡翠の毛と云もきふくろぐと八
俗に云休息する時の事なれど今我豊國の民俗安座
せよと云事をふくろぐなされんなど云ことあり此意也
君侯云あるく鷹ハ人に馴べきものなるに未馴ずして恐る
時ハ毛をあめ馴れハ毛羽をゆるし居くらつくしく見ゆる
ものや又荒鷹の時ハかたりて日を追て毛羽美しかる
ならをかへるといひ熊鷹をしふるをも同しく薫（カヲ）ると云

さて此歌の意ハ春の鷹をさほ姫鷹ともいへバ春を司る
佐保姫によそへたるにて姫と云詞より翡翠のやさ美しき
髪と縁をとり柳のみだれぬき糸よりのなびけるまゝなる乃
なる時しも出て狩する意を大方にいひし成べし柳の
みだれの文字の下にぬくと云ことをそへてきくべし此例古歌に
多し翡翠の毛柳の枝にかゝれるがぬくにゝて糸也
えるあそくいへるや柳ハ元より髪に縁をとる此歌鷹を
いはで志らせより或鷹書に翠なる毛四毛雨覆火打羽
剣羽とも云よし出たり
またしふるれるをのするところや山里の梅乃そなた毛のあたりなるらむ

或人云和名抄衣服具云草帯云波斯馬脳帯ともいひりて此頃波斯國より皇朝へ献る物多しときこえたるも波斯鷹もまさしく彼國の鷹と云義なるべし

天正十七年龍山公鷹百首を紹巴法眼にうけてしるす奥書の跋古写本に見えたる梅の花を見ての鷹の羽風もまさしきかなと云ふ［illegible］梅の

あるく鷹をはしらせてことにもるくの説ある餌をあたへる
時箸をそへけれバ箸鷹と云又と或ハ木の躾(サマ)橋これ
めくあれバ橋鷹と云ともいへり鷹の書中に波斯(ミ)國より
出るに依て波斯鷹と云ともいへり僧契沖ハ間(ハシ)の意にて人と
鳥との間に立てくるをとるものと云意にて間人(ハシヒト)間舟(ハシフネ)などもいひ
いへりと云或鷹書に橋桁に巣をかけしことも云ていひ
着による説とも異説もまた鷹の為に桐を切て橋につくり
据へし故事とをもいへど大鷹にてもあれくせらるゝもあれ
間(ハシ)の鷹による説ともさまぐなれど今ハ略く古事記傳四 本居宣長作
天御柱の條に橋箸同し意にて彼方(カナタ)此方(コナタ)の目を合せると云く

楚辭九歌に美人忽獨与余兮目成（メクバセス）伊勢物語に世をうらされ
あるとし人をまつかゝにめくハせよとものゝまるうれ此めく
ちせもられあまられ約（ツマ）もなめることなく萬葉集の相競端（ハシ）と
云詞も間のことゝムりしく書て翼なき人なれバ人と鳥とれ
間鷹の意れ名と心得むも能叶へる歟
まちゆれまじ風なさきれなきさになる事こゝめく出る鷹うひ
古註になかいるのゝ事と云も又事を意るのゝ事ゆや出云を
くわしぞこれなる事こゝめくハ雉の事にて雉の居処伐耳
押ろく此胡なぞの未明に立出る鷹飼と云のゝ雉鳴
吹て雉子になつせく其れ声を事く胡とく立出る意なる

居し事ことめくハ前夜より曉うけく鳴鳥を雉の類事押さるく
飛るよを押えうまてその趣を窺れ野山に出る意成べしさて
鷹うひの文字鷹書にもなほ事と云文字有ご
押のく意を含める論あれども此に出さぬ歌にも鷹
かひ鷹人このり人と歌によみ来れる
目うけさぬるのゝ雲れ胡なされ事を思ひく押く事もたまし
前の歌なる事こゝめくといひ此哥ハ前にも見え押さしなれ
やゞてよむと次第せし歌也群書類聚の塙校の本にて
三ノ句を朝原とし五ノ句を立むとあれどもよくも事えん
事を思ひて多く雉子に限るべし

たる所はかりそはなれ武蔵野に遠山毛なる鷹をよみ侍り
古語に遠山毛ハ若鷹の毛を出るを云といへ共無く遠山府
ともいひて去年生れし鷹ハ若鷹也一と屋まはる片
鳥屋と云に成りて去年の毛を落し初く是を遠山府と
云也又一年立と云ふて鳥屋と云初句の意にたる所もさき
ほもの意也果なきもむさし野の限りもあらぬを云たるに
多くしてかく広き野なれハ山も遠くなりけり遠山
毛なる若鷹をも思ひてはるさ春日に果なき武蔵野にあると
云又遠山府と云て府山の形になる故也山の形小く見る
より遠と云とも見べし

みな子にまかりせしも未だ待つて尾もさそれ鷹飼のもの
継尾の事思く鷹の尾は數十二又ハ十三尾あるを常とす
るをとるに尾少くもちひて鳥をうけるものなれ故に尾を
損ふ時は継事ありて鷹漆[ウルシ]と云ものにてつぐや勝軍木[ヌルテ][キ]の
脂[サニ] 方言山むだ さくらし新たに鷹の心よくしぬ時乃さまを云鷹は
獣に志をく鳴きもしたる事なき獣しかる時ハ紅をつけて飼其の
狩人ともめるに是ハ鷹人の心得をとめる獣なりチンくと
鳴を鶏[ニハ]啼と云ヘツくと鳴を鷲啼と云く多く此ふるかすに
時になく驚也ヒイくと鳴を餌啼と云獣の意にて無
まと云より打らしせる所まてに出く狩しるる所は狩も

たるをまちえてそのまゝにつきて継尾の鷹を添て出るに
又うちつゞける尾を継て出るをこの◯にて讀るなり初句の
に文字の継字の誤などにてあしびや継尾は白鳥の
尾をさして継事はそれ安く心変も安き鷹に注ぐ
事を云ふ鷹書に一條院の御時正親卿継尾をし
給ひしを初とし又政頼卿ちかづきつれしよしもみえて
くはしく論もあれど今は略く
たかの継尾もこゝろ得の繪をさし鷹のめをもむもゝは黄にて
古語に云るがごとく鷹はとしふりて卵をうむなるあるまじきなれども
さりくめをもむとて鷹なるの目を握むをいふ目をつかむ時

やがて卵をうみ出せる汁の黄色なるをのなどいふなり此歌の雁などを
いと多く得かしとねがひし時君侯は親しく見賜ひ問ひ給ひて
撝扱の本にては初句のの文字にとしたり三ノ句のをが裁ちとし五句は
そをもとす三ノ句の鈴こは此方よりしくはゆきは鈴子を多く
さげしものなり歌の意は此やむなしくよみしを趣向ありて
たるは鷹狩にもしさゆをいへるのことくなるもてとうち
黄金(コカネ)の鈴をこの◯をこゝろ◯の鈴子さし鷹はきの望みは
なるをとるべくそれはなるの目を鷹のつかむ時まその出る汁の
色さへ黄金色にうるはしといふなり萬葉集巻十七家持卿の
長歌に 上略 之良奴里能鈴登里都氣底(シラヌリノスヾトリツケテ)鷹の

書なとにしるしぬるもの歌ハ十鳥屋飼鷹にさしなどいへ栗
古語に春の雌鳥を金鳥と云事を出せし此金鳥の事に
一條院御宇の故事とも武用辨略にくはしく出せれど此
歌の外詠事なきハしるにハしるさず
なくなるを狩やるとよれぬ鷹が歌のまさしく出るこのうた人
鈴のまさしきハ詠音出る時も早知るゝのゝそばかゝぬ
くまかにあるけるにや 鈴の子ハ鈴の中にいる出を云 樺又ハ
木の枝やらの類をさしくならぬやうにあるるも歌のうへハ
鳴るを夜とりかへく羽とく歌のことさしくもあるかは人と
いへるなり 鈴ハ鈴(スヾ)緘(カラエ)毛又ハ鈴巻(スヾマキ)ともいふ尾のうへにある

毛に附るものなり 鶉も雉も多く羽音を出せるものなれど
狩鷹ありといふなり
狩につるゝあしをひとつゆるれ雉子の山の鷹狩羽ならへ
此歌古語明解なれば二ノ句塒枝の本にハとをにやと
きこゆれどよろしからず 惣じて鷹ハ二月の彼岸より男を
定ることなく女鷹男鷹を追ひつるをならふべきとは
依よりよそふりなつくはの事なり 歌のとりては猪と見る
つるとうけし雉子も此の二月の鷹狩ならふべきなるを
此のが妻かはらそひとしきえてれど此しくよみなれ
歌から紫鷹ハ雌雄の中女鷹大なるとなかく女鷹を

尊む又女鷹男鷹を追てその強さを識てつまとなすを
男と定むこれハ巣卧てゐる中盛なる鷹にてよく出るに
なりとぞ後京極良経公鷹三百首の中に春ねらへの
鷹の心はなかけきをバいかなるのうしみたつむとも
とあり松鷗軒記曰ねらへ鷹ハ春の巣山に入て
大小となく飛てねをしらべ大鷹に小一羽とけしたる
ましみをつかすと定む一羽とハ三百丁の事にも羽ハ六
百五十丁を云叔これ妻おもしひと云須ハ歌にて古く
萬葉集巻一中大兄命天智天皇の御製の歌に出てきまた
より後の世にも人のつまおもふ人と云事少からず古き

歌の詞にもよみ給ひしものや堝枝の本にて恋の部を
みても急の歌なりしね歌とも多く入たるに此歌をバ入ざるハ
いかなるや又或人のいふにハ此歌ハ鷹の雛を追行さ女男
鷹を女鷹の追て妻定めたるねらへべのやうに聞ゆるもし
さにてハおほけなくとても叶ふべし 松鷗軒の記に云
其文の一羽を三百丁と云ハ其三百間などのあやまりにハ
あらじや丁にてハ間数大方かはらぬことなれども
春の日にかかるにかる狩に鷹や雉子もおくやうてみかしむ
うらてうまで春日の長閑なる事にて鷹の心静に遊附
なるさまをこの外くいへるのもや 野ハなきさハ古語に云如く

よく馴附たる心也
たる鷹の世話しつるは鷹をんなくてもぬるこそたえ済る
春日ハ長とうけしものにて歌の意ハ明らかなりさて二月頃の
狩らへ時分にて多く鷹肥さがることのにて鷹を逃す事
有ることの也依てさまで盗喰するにておく様にも去追して
鷹人の来らざれバ我のづから盗喰するならし君侯への繋ひ
き塒本にて四ツ句をんなしてもとす是にても叶ゆ
霞つのとりまて済まする日の影もとひ尾の鷹やまハまし
春の日影のくまでのどかなるよひの程としだんおハるのへしく
とび尾の鷹ハまのとを云んや 甚またる 鋒と云 頚よ縁をとれたる

とひ尾ハ鷹の名多き中の一ツ也石打のちかきを
よび尾と云古語にもまふしおきしバ鳶尾ハ嫌ひ鴟尾を
好むといへども鷹尾も十二枚のうち皆揃ふ鴟尾ハ上尾
ちかくて次く縫くあることの也

春の野に女鳥つきせるはしめやかの我のなせるならや近く成らむ

女鳥つき済るとハ女鳥よつきたがるなりし鷹と云にて熱て
女鳥なきやかつら成るのにく又とり安きものや然るを
安き女鳥を鳥屋へ入むとするまよとしする是を忌ま
かひと云ものを限なきよう此を忌まし させらく提安き女鳥を
とゞ済とひふん也 其ゆゑさハ宿木(トマリキ)の事にて哥のこゝろハ春に

はかれやがてゐる屋へ入らむとする時女ゐるをとりたがるはし
なかとかく下の句これハ妹のがれ妹のた麿をさしもく
いひく麿の宿木(トマリ)にとゆる鳥屋へ入ださる時の辺付めるむ
と云のこや二三ノ句の中に女ゐるつきゆる時始もしあその
なきハやがてゐる屋へ入むとの近く成らむと云こなる
ださし塙校本に四ノ句妹のがまなねとして又或古寫本を
同しくて註にとや此事と云是も安らかならよく叶ぬ也
となるそて妻やうしむるたりれほろうちゐるこそ叶ぬ也
麿のとらむとする時おろうちく雛子のなく八妻や恋しき
妻やうしめこかくてやがくちしうにとゐてもきこゆて

妹のがゆりゐをおしせく雛子の啼事これあはれさまし
とみ給へる折り萬葉集の歌によさる雛子のつまこひふ
とよみしを思ひ合せ給へる筆べし塙校本ゆゑて四ノ句
うちつくとあるもよろしきさう
給麿をさくつよりとまゐくゆく野末も山のとこえなくて
解に不及詞も意をのしろや麿人も唯一よりと思ひ
ここく出しに給へに山ゐに加給ここあさ雛子のいと多く
鳴なれバ一よりゆてもやまじれんとふくわゐる給るべし
よりと云詞もゐるを合せむとこく麿もゐこくゐるに辺よろとり
出し詞ややがて一合せと云がめし依く下により數とゐよめるも

春の野に狩鷹かりの同し日はくれぬとや鷹をとりハこの八ましし
古語に同し日の処を可尋知と云ハいかゞ此歌朝と云詞に
むかへて暮と下にいひ鷹のとりかへるまゝを鷹に喰るを
とりかへといひて意をもたせ日数とく過て其の朝立し
同し日にくれまで狩くらしてとりしるを鷹に
とらせやかへさんとぞ同しちに羽を朝と暮とは二つなり
うけくいへども四五の句鷹にとりやかへましとよむべき歌
なれどもくれてやのやみをさしあてハかくいへるか
百し此の小山がへりはあらさきをさらめて鳴をハきそくれゆく
あらく鷹ハ去年の春生れて深山にありて飛行今年の春に
いくたびか鷹かひのまゝかへせるを小山帰りと云叔此小山帰りハ
馴つゞきたるをもゆく鷹かひも能く得かくなくさまれ
なつきやすきその此歌の意ハ小山帰りなる鷹をやりく
ありさわかせて羽合せしがその方もなくいつかとしく
なる数をもとしせよハ又今年の夏なる屋して古に葉たて
あとまよひしく飛ることなきバ少しはやく日数をとらせ
まほしく思ひとりさぐる鳥をおし喰せてもぎとりたく
又数を合せたやと鷹匠はいかくらきしく日を送
りし中に春も来るなり能く思ひまべきなるを
なく鷹もなる屋に入りくしむかとするの心て名殘を惜む

意也かざとなるにおもしろげなくかざ也とも跡を合せむな
よりとも也る事也 塙校本にハ結句たるぞられぬるとも
春山にるなきのわけ侍のくと明らく月よ出る鷹かひ
古註に四毛の脇に在毛を尾ろ毛と云と出 風切よりも脊に
附る尾よ大羽四枚あり其側よ在毛也此書かくれたる処も
なく唯ころさしうるまれ尾しきを見るやうよ覚しくいひ
なだしく云ふべくもいとめでたく然ゆ鳥の洞たる多く
ともも和名抄羽族體云倍羅(ホラバ)麼日本紀私記云 師説鳥乃和岐乃之
多乃介乎為倍羅麼也麼謂真實也言鳥掖羽乃古止掩蔽之周也案輿匠也今俗謂保呂羽訛也 此わらだ尾ろ毛同事也
たる此日の長き遠野の末つきる鷹也るをとるらむ

古註よ待鷹の事とハ鷹人の待合せて居る事也さてく
始合せたる鷹とりそこなひし事もあらむと待合てとるを
そこなひし時又合せやる鷹の事也 依て末つきる鷹とは始に
ゆうひ歌の意ハ春の日は長きとうけて末ハ野の末を継と
うけて待合せて又合せやるも鷹のとるらむとも也 塙本にハ
三ノ句はのどにとし四ノ句の末を居とあるをよろしかるべう
或人もぐるハ助るは上略かくハあくがらかしとひへど拙るを
よ後しうらび唯長きを春は日よつけてその長きをあらく
行くハまさきと下につけしめことみるべし
たくるみれやさしの後をなるさね(ねイ)ハさくらかりそる(とイ)ひとやうるらむ

国立公文書館 National Archives of Japan

歌のこゝろハいかゞや絵のうちに木の枝などさしそへて鷹に絵かゝ
させ給ひて鷹の好へもしられぬに櫻狩する花見の人々を
鷹をハとらへつけさしわるや是ハ鷹の返切にて末成とりて行
へしられぬをよみし歌也 塙本には三ノ句かりさせ給ぞとあるハ
よろしく聞ゆ又四ノ句のふをにとあるも義ことにまさりぬべく
おもしろく侍る成べし則返切にて行へしらざる鷹の絵をも
せさればバ鷹人かたらひこと尋ねありくを或人ハ鷹を尋
ぬるとハしらでさくらかりするとや見るらむと云こゝに成也
此歌さくらかりする人やと本のまゝにてハ聞えぬ歌也
ある野をもつまごひするや犬がひのちかふにおどろく雉子なるらむ

古注に義なしと云るも義なくバ尋ぬべきよりもおもはぬに
いかなぞや此歌は鶉雉などこそ犬をつかふものなれバ春の
野山におはする雉子のちかふにおどろくを見て犬をもおどろかせて
入るといふこゝろ成べし犬を近山につかふ故に春の野より妻
こひしつゝ雉子のあはれげになくらむのかと見るべし 塙
本には四ノ句てるひと又古写本にもてるひとしるく注より
名所とあれども近山とある方よろしあかるハ犬と雉と
二つにかゝれる案
ちりかゝれ給ふによせて浪慶の浦に寄せのさへづるゝの落葉
古注に唯義なしとのミいへるハいとおぼつかなく此歌は

はし磨の絵とうけ又舟より入るとうけ浦よりひるまとうけ海士
よそをさへづるとかやさへづるよりおるとまうけしものや此歌ハ此集
中にくもあらぬ心を用ゐひく巧によむなひし哥ところ源氏
物語須磨巻に源氏の君明石のうらにさすらへ給ひし時あまう
どもも近くまゐりし事を其文に曰安げなき身の悲を海士とも
申ひそこそうと知くさへづるも然れけくへも同じ事この形も
知れ給ふ源氏の君の見給ふ下略さへづるもとを知る言に晴るやうに海士
どもれ物いふ事の心ゆるもきこえぬがさまをいふや依て古く
唐と云冠辭にさへづるといひしや藤子ハ鳥の飛ぶ二度
藤るちよをいふそまを磨詞にてさまをむせぶとをいふ鴨

夫木集　盛方
水の面の瀬を見にこ
あさけり霧の
浦にやつのと
わするとも見れ
まなとも見あり

などゝもいふや、さく磨人またはそれ藤しかるにを同當にせる形を
此歌のさまハ上ハ序にて磨れより藤まとりふのことを源氏の
文を用ひてふかく考へ給ひてよみなりし歌や又絵舟と
云に二説あり一説ハ嶋山などにゐるをやうじとてみなに絵て
多く沖の方をこぐある事なきをいふ又驛路の絵を持たせ
公用をうけ給はる舟の事と哥千五百番哥合顕昭もいく
みなとよそるなみやさてこそむ浪摩の上なるべくいふなれども
日本書紀仁徳天皇御巻三十年九月中略幸大津待皇后
之船而歌曰那珥波譬苫須儒赴泥苫羅齊ととみ
給へるも是も公用船なるべしと古き代よりあらしまりとしるる

或人云凡鷹の巣ハ松杉檜の類の高木の梢茂りて下枝の近き木をえらみてつくるものなり其故ハ蛇のくらひ上らぬ為なるべし又鶻の巣ある高木ハ犬もよるべからぬなり上わたくいやたかく巣をつくるなり其枝を並べて其上に松の皮をしきて巣を調る樋さへあしらはね古巣よりうつるや母鷹ハ鶻コノリ父鷹ハ兄鷂之

延喜大政官式云凡左右辨官各録下入奏并請印文書及
請ニ進ウケタマハル驛鈴傳符ヲ一色目上牒送少納言とも如く又其國守位
姓名趣任日所給若干剋傳符一枚右驛鈴一口とも如し
子をあまたかへりおろし巣おろしつるみ山の鷹ハ世をそろひ
古註に可尋とハ不祥なりや然して鷹ハ去年生れの子も
一昨年生れの子も冬の中ハ里に出て木の中にゐるをとるを
餌として食ひ居るものなるにこれバ山に戻れバまた
生れし地のが山に帰りて居るものなり此頃のことハ彼のあたりこれ
鷹の子も是に成ぬれバゆりて地のが巣おろしつる山出て地の
地のまそうれしまなるとなん伝て其の鵜とハ捨飼ハ多ての名をも

そ卵をあたゝく事ハ母鷹巣にゐて父鷹餌を運ぶなれて後ハ父鷹子をあつかふとぞ

喰ひけるを其故に捨けバ捨かひと云よるかたなきながれバ之
又巣卧つる女鷹に男鷹の子を捨て投入て其年なかや
是ハ巣に上より落して子に与ふ捨かひと云塙本にハ三ノ句
もがしきるとぞ
妻あつまり末居にうれる鷹の名とれ地とさそふしく松風をあく 藤イ
古語に末居をとりし鷹の名をとるをもとハ死ぬべしとなんとも尤
不審也此哥四ノ句塙本又古写本中にて藤さそふしくとして
古写本の頭中にて藤府の鷹とれんをよめるといへり此古歌
ぞこえてあやまりもよろし藤府の鷹ハ心強くくるひ
ながもて訓附られるをあれバさきがしくとうけたる案べし

君侯種々考へ給ひしかども松風と云名の鷹まれなく又鷹の
尾と假字ハ違へれどもつゞけしかなく尾なしと云もひとつ
風の枝をなをしぞなどつゞけしか又身とうちしめ巣兄弟は
扨くるゆゑひとしざるにやとまでさまざま論ひ給ひしかども
塙本又古寫本をもよくよく見るとあれバかゝるてふ詞も松風乃
松ゆゑもうることくよのまゝにありてく鷹の名ハ藤原府の鷹をさる
方よ残しく定めると定め給ひき
鈴はわらうちの毛乃先をさねもとれさかなのとされさゝ帰し
古語に云るかくそうしちゃうの毛を股ととて居る毛ゆゑか
四五枚をそ外に出すをおらしゆうの毛と云内に出するを深う

きゆうと云塙本に初句をとえしゆると次此方に給し四の句の
雉を鳥と次給のうちをわらうちの毛はやさしと記したるは
日もくれしをぞそこを雉も日ふの日に給に鷹にとられぞひう
ましとられぬ事と知とよそなげく歎れに思ひ出しにこそ
さうまし八ぞひの二言約ツヅメてざと移る佐くとられぞあら
ましのんや
日の本に此ふくふかよかゝる翼に知し鷹の子乃なきとかりてむ
古語に白鷹知ろ欲猶可尋と云をとかしゆうと云文知しゆう
と云欲との不審をのらしゆる欲かゝる白八知しとよむの例の
ますやら知しる菊知し露知し駿知し浜の敷やてふ

の詞をたく古事記萬葉集等皆ちふといへりを中古
五音相通へがてふともちふともいへるをといふの約ちと知ればやといふを
云意也されどもかといふかにのことぞ也又古註に諏訪明神とを
と也と云ハいつ頃なるにや此諏訪の御神の事ハ前にいふ七嶺の
鈴の歌によむハしく論へるを又鷹に蒼鷹と云文字もあり是ハ
白馬をあをうまといふがごとく極めて白きをいふ青色に近き故
なるべし蒼鷹もあをたかとよむべき歟又天竺國白王山に
萬物ハ草木に至るまで皆白くて此山よりいづる鷹の事ども
とりいづくいふも無益の事ども也此歌ハ唯白鷹ハ世に稀なりと
いへども我日の本にハ多きこといふ山の中ハこの白鷹の子の

などかなかるべき極くあるべしとよみしのこと也既に白鷹記にて
上略此記ハ嘉暦二年丁卯三月前關白良基公作とも九十六代光嚴天皇の御代の作なり
抑上古の名鷹ハ天智
天皇の磐手（鷹の名下皆然り）野守延喜の聖主の白兄鷹一條院乃
鳩屋赤目みかど小一條院の藤花韓巻山峨等也
近比世並せる奇鷹あり爰に信濃國祢津の神平なる
處の白鷹其相鷹經に叶へるのみならず毛雪
あらとかみべし云くとも出又鷹の書に白鷹と云に九品
有てかくの名もありて其見様などさへかきあらはせれども
今ハ略きて出さず抑かく皇朝に於て鷹をとりてあそび
給ひし始ハ日本書紀仁徳天皇四十三年の条に上略

依網屯倉阿弭古捕異鳥献於天皇〈中略〉召酒君示鳥酒君對曰此鳥類多在百濟得馴而能從人亦捷飛掠諸鳥百濟俗號此鳥曰倶知〈是今時鷹也〉乃授酒君令養馴〈中略〉以韋緡著其足以小鈴著其尾居腕上是日幸百舌野遊獵時雌雉多起乃放鷹令捕忽獲數十雉是月定鷹甘部故時人號其養鷹之処曰鷹甘邑同五十年三月壬辰朔丙申河内人奏言於茨田堤鴈産即日遣使令視曰既實天皇於是歌問武内宿祢曰多莽耆破層宇知能阿曾儺虚曾破豫能等保臂等。儺虚曾波區珥能那鉞臂等阿耆豆辭莽。揶莽等能區珥。箇利古武等。儺波企箇輸揶。奉和歌もあれど今あらはさず。是時ぞ皇朝鷹狩の始めなりしそれよりこなたの御代々の天皇遊獵〈鹿猪の類の外に〉野行幸し給ひてこれ御狩をそし給ひける後にハ近衛府に附て鷹飼を多く抱へ給ひしや哥の題に野行幸とあるぞ御鷹狩のことなりされバ諏訪大神ハ掛まくも皇朝にて鷹の神と崇め奉るふるきハ此大鷦鷯天皇〈謚仁徳天皇〉にぞましましける此天皇ぞ世人の知ぬる應神天皇の〈世に云八幡大神也〉第四の皇子にましましてあめに仁寛慈恵の御心ふかくましまして御代も八十七年〈御在位〉なりけるを世給ひ今の世にも若宮八幡宮と諸人此

いつき祭をなくいと貴かりし大御神にましゝゆゑに是をぞ
鷹人の祭となるべき事なれども也扨かゝる巣ハ巣を作る
ことも多く春の八十八夜をさかひにて卵をひとつなる
そのゆへ依りて是此部に出く春の部とぞ
されども夏のはじめハ近く成る鷹まつさとりの心得有雛をとりて
古語に云夏の近くなるをまち鷹ハと云ことなるまでとりのこしを
たまくおとしいふなり又或鷹書の問答にたまいかのつよいハ
答曰雛子の雄鳥を申也惣かひにハ八ぬきそなる鷹ハ
とりかへし此たまとハいふを雄なる事とさもありてそれゆゑ
説とも成べしと君侯いはされける事のことゝ云詞師詮なる

歳の書れしまあるまじくして書にくはしく出て茲まで月
清き風をいでて是も頼るれ同じく出まかく近くいふか
月が清きよきなるがふかきにもと倭よりいふまで也近世こゝと
いふべきことなきにもみえることての言是よりもとものいろに清かひ
さみ形りといひられまを紫
木ぬけなるこゝの鷹ハ女まち成しまた男形くに忽をうけそみえて
古語にこぬ事ハ木ぬけゆく菓所ハかひをとりたりしむ乃
んせといふハおしゆるびし此男鷹ハ卵をむきとて菓所で
居くわらむ男鷹陽分く餌を運むてやるとみええこと
うれしことなくに木ぬ事をするとみえるべしかるにてハとりそこぶ

和名抄羽族類
野王按鵝音孚俗云
加倍流
卯化也

さかをいふ巣の空に掛く与ふる事也
めたかれまて子のかひこあたゝめてかへりたるを見れ人のおもはくに
古註に義なしとのミいふハいかゞ鷹書に母鷹を大
鷹といふなるを云と云四ノ句まてハ母鷹のうへをいひ五ノ句
一句ハ全く跡ハ人の手にとりて飼そだてゝあるをとるといへるなり
人力をそへてならはすといふこと也又二ノ句の捨子ゆゑといふけハあたゝ
めそとよりゆく人のおもはざかしげゞなどもおなかるべし今の世雞卵を
綿に包ミ懐中にてかひこれさまるがごときにもとやいふハかりがたき
事なりとして捨子までもめ鷹につけてそれかひ子をいたゞ
きあはく人の術にてかへしとらる方にそこゝへ安くも鷹の卵を

とりてかひたてさする事もあるなれバめつらしからぬ人ハ
育事としてよみし歌べし
同 母たかのあたゝめかへる子の巣立よりなれとまれぬらむ
古註に可尋とあるハいかで前の歌の人の思はざりぞとくとなけて
並べよみし歌べし是ハ母鷹ハ同じ才なりてかへる子の中に巣
立そめるも又をあさりてよく鷹もあかで同じくなるべきに
いつまで西ハあるぞとのいひ也塙本に一ノ句をとしてあるハそえいかん
はるかなる飛火の野守いまいくかありてか鷹をとるやに入まし
義なしとのミ古註に云ハいかゞ此歌ハ古今和歌集に
春の歌にかすが野のとぶひの野守出てみよ今いくかありて

まちかねつゝてむと云を本歌にしてよめるものなりやまちつきさせ
野を守る飛火の野守にこれハ春日野の飛火の野守出で今幾日
ありて若菜つむべきといふべきぞさて鷹をバ今いくかぞうち
ろくよる鳥屋へ入べきぞと思ふまでをひらけしとや古歌の初若
此若菜つむべきはをまたんと若きの鷹をやがてとる鳥屋へ入
べき時をとりかへてよみ物へるとまたく替りしにさし待と
名所を惜むとそりかへるにもいそがしさそまし此
網るべきべしと云と同じ心にて古へ入むと云んなり
とかくハ古に羽かひてそれつちしるし此羽ありそれむかし海への里
古語に鷹の木の栖を鎌倉里と云と古ハ異名を云なり

心得べくし又羽かひてちかひ可尋とのことハ知ざる也と云の
歌や君侯の君ヘ仕よ歌ハ羽かひてちかひつハ鷹それそれなる事
にや隠くれて鷹かへて本草にもどると云事ありされバ
それなる鷹も一度ハそれ初の宿にもどるとの出て其の所に帰るを
待くらべき事なれど二度ハ帰らねとの也思慕本此立歳見
なる木の間にそれなる鷹も羽かひて八本草にもどらむが為に
羽をかりしく又一度ハ帰りて其同じと此ハ木の陰にあるやと云
事ある也鎌倉の里にても不審や又此歌まての部に
入しものにて住と云詞にて入りし塒本にて初句をとやまハ山とも
此鳥屋際なれバ今も鷹多くてとまりに入安き東北乃国なれバ也

ゆくハ一年づゝかひてある鷹をハ冬に至りてハ放つなりといへり
塙本に依くとやまがへりとある時ハ夢に入し歌の註もなく
折しもかくれバ此方に從ふべし羽かひての詞れ解せられて云ハゞ
あらたかなまとりし鷹を又放ちやまとバいふなるをみよ羽をとるハ
させたく見わつるとよるべき歟又鷹書に出し鷹の歌に育る毛
ふるてふ母のかへる鳥深ひかけるくとかへるか雨ふれる里とうたへり
生れける日やかりそむそゐるよりも守まもりて川る鷹れも雨さり
古註に云るがごとく鷹の巣を守る人の事也と為さり八巣 此中
ゆくもに此鷹の事也此歌三首采られ日母の哥此次に
なるべくかくべきとの事也 塙本中ハ五ノ句を雨ふりとあるハ理なし

天正十七年龍山公
鷹百首古寫本
行幸奉らし御猪の
世への物しゆも
なかゆる鷹ぞ母を
まほせぬ記よ
とゆるとハ鷹の
毛をかへてなや
よりかるゆとれ

はしたかれと保る山のおつき出きたるまで羽つかひなれやさみまし
是ハ古註のまゝにかたれされども歌也 梓弓ハ春の
冠辭にいへるも引もつゞくも皆弓の縁語也 鷹ハ山へ帰る
なるハ羽つかくふくかへると云こゝ也
鷹がひの物ある遠目れきぬれとハ葉やなるのいのちかへしむ
遠目を書るんの事也 今ハ為見なしと云狩場の役名あり
此事也この歌の志るべもなもあそくて所え 安之歌之 萬葉
集巻六 幸吉野時の長哥に見芳野乃飽津之小野笑野上者跡見
居置而御山者射目立渡朝獵尓十六履起之夕狩尓
十里蹋立又同巻八巻十三中も射目立而などもあり 冠辭考ニ

かゝるハ周禮に出し迹人ハ中士四人下士八人史二人徒四十人（迹之言跡知禽獸之處）とあるに似よりとおもハれしかどさらにちなみなき
なくれ狩にハ鷹飼部犬飼部射部跡見部守部野守部などの部々あるべしとおぼしく出しき此遠目もおの類ひのものなり

松の枝や梅に結ひつけて佐保姫のより数をえて帰りかり人

古語に佐保姫をまつの鷹の異名といへり又あるはまたのともいひし得物多くて松の枝や梅の枝に附つけて帰るハ鶯ようと打ちさけものなるむとよそへたりける歌のなり

木紫の雪一の巻終

木紫乃雪二の巻

上野介藤原重名釋

○夏　二十首

毛をかへてかへりいでくべき若鷹やとや（鳥屋際）さいでそのあかふ（赤府）に羽つむ

古語に云如く若き鷹ハ肉の府おほくなる程なく白くなれバなり

さればそハときつるものをば鷹の屋をも此めた女なるをそふに忘飼のすみ前にいへり此外隠をとりて飛しなるまで出て云詞なく末も文の始の歌とした

なる庭に入る八日薬師の日なれば其鷹に羽をおとしたるらん

古語に云る如く卯月八日入て七月十四日に出る又或鷹書にハ

る座に出入時なくしにけれど今も是に出されし又
式庵書に出し庵の歌に　るやに入たる八日やうし秋をおもれ
さらくもきせてもえといふや今の歌と同しこぼく此歌も
る座に入八八日とふ始し歌やさらく此歌のさハ薬師と云
ら祭下にふありといへるも又世に薬師佛を祭るを八日といひ
なかりしゆゑに彼佛十二の大願をたてく遍く衆生をもらすが
中に第八日目ハ殊に衆生の諸病を除く大願なれバよし
依てやがて八日ハ衆人の参る日と成て八日薬師とさへ
いひならハせり殊に観世音なども三十三の大願をたてそく
より三十三の名も有りし　仏経にもたかく廣くさまくのみを

まうけいひろく衆生を導く方便ともいひしが後に此事を
僧寧山に問に寧山曰元来過去佛に縁日と云本據無之
事然処後代の祖師一月三十日に三十仏を配立し其中
薬師佛を以て八日に配當す故に八日を薬師の
縁日とし別に子細あるに非ず朔日ハ定光佛二日ハ
燈明佛三日ハ多寶仏などにて三十仏を以て云も前に
云十二願の説本據なき事又経文にも少しもなき意
義なし今世に行ハるゝ佛の筋正しき事ハ少く大かた
私ハなきを却て本據あるやうにおもひ卑俗のへくて信
用せしといへるもさてる座に入ハ多く四月八日を限るとぞ

鷹法にいへるも塙本一ノ句なる處にのみと出るまでよろし
かしこ又鷹法に此歌を傳へて下ノ句を鷹の毛落も
あらそひむとへ此方もよろし
夏かひなる處のうちに摂るつまれ毛を表の吟味なしてそれつまれ
古註にいふなるごとく尾の根に白く出る毛をつまれ毛といふ
歌のこゝろは夏かひの鷹や肉めぐくなるつまれ毛ハたるは哉
鷹にあかく狩せし時のり切つるの意也下ノ句を上に廻して
心得べし 茅花とよめり表の吟とへへも
鷂をたかやに入るる夏山かしへあしくや鳥をももむし鈴
古註鷂を山中もつくのすに數と云ハのて歌ハかられける

あきらし夏にて鷂のとるべきなるまし 塙本に初句をはし
あらとせるハよろし從ふべし
たしかなる尾花毛なる也の内に秋なりきに時や來ぬらむ
古註に云 尾花とて男なし羽そて腹にある毛也 歌のこゝろハ
夏の頃なるにさえ秋のことの也鷹の尾花毛にてあ
もハ夏の鷹の肉ハ時ならぬでもまづ秋にさきて秋の
來るなくてあるとの也 結句秋やくるらむとあれども塙本又
古寫本なきてはのらむとあれバ此方によろしとて改む
又鷹書に秋初の鷹を尾花鷹とも云ちし出ても
夏かひのなる鷹にきさらめるとの枝のわさかに鷹の毛をつかり清

国立公文書館
National Archives of Japan

古註にいろ板ハ餌板とてゑをおきて鷹屋に入る物也とあり
古写本の註にハいたかの事也と云武用辨略にハ泥板に
俎（マナイタ）の事也故に餌作板とも云長サ二尺廣サ八寸高サ四寸
五分或ハ長サ八寸又ハ一尺二寸廣サ五寸本ハ梨又ハ桑等を
用ふ口傳ありと云々
みな倚あれ此類をあまた見えてもおろそかに記しがたし此倚りもの鷹
巣まはりの鷹にて毛羽大方に生そろはずして飛をも云おろ
さでハおろさじしるしやおろせバ巣鷹や巣鷹の時分を
をしむれハ巣まはりと云に成也巣子ハことに此倚りハ當分
巣の近所に居ものなりそれをもとる事あり執て八十八夜を

限りとせるや
夜つひのまゐれる鷹なるをさきハや野守の志らぬかた旅なむ
古註にいへるごとく此もろの鳥屋詳ならず野守の鏡の事ハ
種々説ありむかし春日野にみかりの時狩の鷹の行方知
あるをまつりし時ちかくそれより野水を指てかくと
云侍へしとも又一説野守てるを合せて鷹の影を容
雅を見合せる事とも云とハ此説もろの鳥
屋に在る水をいふ鳥屋に入る水鏡の事なくして昔
よりもの思ふ人ことさら此水中をあらはして是ぞ
野守の志らぬかゞみとも云べきとの心を思ふハ

たく春日野なとに在て禁野を守るを役としてつまに
ある人也又按るに知られず八巣にかくるハまどろかれ
かゝる所と云ん中にわしにやそれを鷹飼にいひなら
ハせしもの歟
また其ほろのおひの毛や母鷹の母衣さりにてとりけてさるらん
をのくらふて母衣（ホロ）と云む冠辞也又母衣ハ母鷹と云む為メ
なるをうけくる母衣と餌にうけくの詞也一二ノ句ハ序にて
め鷹の巣卧て居るち男鷹餌をとりそこふと母鷹
うけとるくるうち中にも巣勝りをとおふ子鷹に毛をうけて
くるしむとよみなひしのくにや　塙本古写本中に四ノ句

をなりとあれ古写本の註中に巣の廻りをたちまはるとあれ
按なりとせバ巣なり鷹よりけく め鷹飛んゐるとぞも
ゆくえ安し母衣の事ハ後漢の王陵といひしものゝ母歟
國よとらわれし時母衣を王陵に送りて後に其身ハ殺され
なりし後王陵歟を比しし事と又同じく蘇武といふ
ものゝ故事と皇朝にて神功皇后三韓征伐しなひし時
より始るなどゝありて兵家にてハいへどいづれも正史なし
みえぬ事とも也や文字ハ母衣武羅縨天衣初衣神衣など
と書て兵家にてハいとむつかしき論もありてその形などもいろ
いろに云也古代の絵などに出たるものゝ図形ハ今云母衣とハ

母衣毛の事
上文に和名抄
を引て出せり
考へ合せ
見べし

異なるもありと或我親しき兵家の人云母衣の事ハ異説も
あれどもむかしよりいへるハ母衣おひの毛を鷹のうしろに
在て甲毛となふ或鷹書に母衣の毛ハ羽飛所と同じ尾の
羽かひの合せ目の羽也ちさきをよしとすといふ
かる毛をとりあやめもしらぬ五月毛ハいづれを鷹のまつ落をしらむ
古歌に云るがごとく尾にさゝれて在毛をいふかくれたる処もなき
歌なるべし　古歌の解ハいりくゝられをとりハあやの冠辞也
此歌ハ古今集一戀　ほとゝぎすなくや五月のあやめぐさ
あやめもしらぬ恋もするかなと云歌を推ひてさく五月
毛毛の中ゝにいづれを鷹の落をかもしとよみし也　古写

本に三ノ句を五月雨とかへて毛を雨におもはせたるものと思ひて
彼綿毛と云毛を落さをとりて尾へ入る之武用辨略に見えて
五月毛或ハ五月雨の毛ハ母衣の所輪(トコロワケ)毛の上に生じ今云上毛也
されバ五月雨の毛に對て其下弱腰の毛を雨覆などいふを
いへバ五月雨と云もあれども此歌にてハ五月毛也ある方ぞ
よろしき
氷室山下ゆく水の川ふかき鷹のうつりかをとむるしるしを押く
古歌に云るがごとく尾の中に樋を掛てさくらを入るゝ今も是
よし則此事成べし武用辨略にも蒸(ムシ)鳥屋とて四方を土にて
ぬりたる是を氷室山と云其中に樋を通てさくらを入る下

行水と云ハ是也唯衣ぬきたる屋の中に入並ゐてあふれものを
やがて氷室山へゆくなどいひし君候ハ氷船と云までもある
なじ餅を冷水にひたしてすゝりしとのみいふべし衣ハ餌損るゝを以
なればひたしゆくものゝ也氷室山の事ハ其始ハ日本書紀仁徳
天皇御巻六十二年の條にいはく額田(ヌカタ)大中彦皇子猟二于闘(ツ)
鶏(ケ)野一時皇子自二山上一望之瞻二野中一有レ物其形如レ廬仍遣二
使者一令レ視還来(テ)曰窟也因喚二闘雞稲置大山主一問レ之曰在二其
野中一者何窟矣啓曰氷室也(下略)是ぞ皇朝氷室の始也
それよりこなた御代々にあまた山城國小野松が崎を始めて
其外にも名所ありて古事多し今ハ氷室のこともたえて御厨

子所預大隅家より供氷餅ハむかし此大炊寮の遺風成べし
衣かひ此る屋ふくけ始るわたちにひたさるてせてくふくもまてゐる
ひさゐる八毛を引ゐる丸ゐるを云ふくけ始るてゐるやの内此晴を
云げハ俗に云ふくさうにあると云意成ハさうげ如しげなど云も
皆同し頬かくをへてくりふうつさ詞也ふるもハ绞也頭のことハ
衣かひのゐる屋此ふくき中にありて人を恐れて頭ゐるに毛を
引ゐる丸ゐるをさせてく绞をおくとやふるゐる足皮をさへゐる此
ゐる屋を出さるむとある此の事也や
夏かゝる癖のゐる屋始るにゐさゝさくりや人の頭をゐかりかしむ
古録に云るめく昔ハ糜を頭しくも餌にかひし成べし今ハかゝる

事ハあしべのかりくさにハ鼈などかくれハあるやそれハ水舟などに入て鷹にえさをあたへしを今ハ千餅の事ハ多くなし水浅きハ上のかたにきりて下の深き杁のやうにさしかけたるをさまくハ上下をも引持たる云筒や塙本なとに結句の深きをはしたとも著餅のことなく是も岩也べきか

秋

過されたる尾の垣内の中にわたなのひしめく花ある尾や出さまし尾のさし花と白きを柄抄花といへど古註にあるがあし又鞭のさし花をも柄抄花といへるを此鞭をそてえさをもちひく鷹につかふるものなればや此かへの中にて八尾のすりや上ハ序や夕顔のあを秋過ぎ六月に咲きたるのすれハなる尾の垣内の夕顔とかゝ事

清水濱臣云是ハ柄杓の字音なりあるハ匏を俗言に轉してひさごとなりしなり聲ハさかりし俗言にさかりさむさかりさむとをさかりしを云に同しされバらハタ顔の匏とつけるのにと柄杓とするハいかにも俗なるべし

なり夕良の柄抄ハたく匏を柄抄に用ひたるよりいへるに依て中なる月の柄抄とつけたり彼夕顔のめでたき尾乃秋過く成ては出る也とよみ給ひしのえ也又夕白花瓠(ヒサコ)花とうけしかや詩曰蟠々(タル)瓠葉采之烹之と云も是也鷹書中ハ拾花柄抄花非尺花などの文字をうけたる西園寺殿鷹三百首の中に　夕顔の花毛なるをまつかせく出るやうかりなる架にかくるらんと云歌も出たるをその鷹の胸毛の白きのむしろにみえつるハ位の毛をも拵のことをしらむ古註に胸に餅を持て胸をふくらけたるのに毛を位の毛と云とかや餅包の事は求べし高骨の処脇定とおぼしく

連るものなり胸袋の毛餌蔵の毛なり今云胸毛白きを鳩毛と云
或ハ鷺毛ともいへり是鷹頭の鍾ホとねの毛とゝも餌持の毛なり
と武用辨略にくハしくあげたり扨むかしより定めたるといひより
位の毛とうけたく是ハ衣文によりしなり也君侯云あつく巣
鷹の毛をとりハ是時春の巣鷹むかしどのやうに定めたるその也
綿毛のり毛うぶ毛つて毛とかいやまたむかしごと次第ある鷹の
日を追ふて成長するにつきやがてたる屋出来べく調ひたる
形をとぶ羽にも鷹のむかしのよりたるハ古羽を落してあし
つて府を出来是をむかしあと云むかしとハむかしくと云がごとく斑なる
ん也のたゞハうぶ毛つて毛などハかはりて位の毛にあるを云

巣おろしたる屋のうちより手がひにかへしてやるをとらまへむ
古語に云るがごとく摂や鷹の子鷹に爪をとがせむ為に石を
入れおきたるものや今もたる屋に石を入る事あり之君侯も
石ハ鳥の上にいへバ何となく硯の水とも思ひしが也と
ふるくよりその綿ひき
たゝみし孫くの毛をふくむしたる屋のうちよりあるや待ちむ
古語に云るがごとく綿毛を雪となして孫ぐの毛といひ
ありたる屋の中より得てのち多かるべき也ありたる城
待しむものなり
其鷹の毛のうかゞひしたるやうひ秋をまちて也まづ出たるむ

毛の為〆ならねども今年の巣子なれバ毛をかぞへ論もなく
毛は年にかはるも鷹にかひ出さしむ秋の頃にいとさむく
なる将出べき秋をまちてなる鷹より出さしむといふ也 塒
本や其四ノ句秋をまつてやとまるらん是 鉢ハ不来とさくも
毛羽をかへしさへ出ぬればやがてむとよことに来べしまてと
てやとおとまでうし表のくれづひ出てんかるべし
たる鷹のうちの尾花もよりやこちのくの其のよのふ乃も鷹來らん
尾花摺毛ハ古語にいへるごとく名ぬしたるごとく腹に在毛をいふ
この陸奥の鳥ふとちもまの歌をおひてこの鷹の尾花
まり毛ハみちのくの其のよふるも出し鷹來らむといへる也又

文字すり毛ハ鷹の毛乃名也 二ノ句のや文字ハなりや
うちの鷹の尾花摺毛なるまでられ也といふこゝによるべし
尾花ハ下にかつまくもまりとかあし事なし 後京極
良経公 鷹三百首中も 春 其のみなるまちまて羽を打ちはらひ
鷹狩りくる川辺へのまいるる忍 山も名所中く鷹を
多くよめり

木柴の雪二の巻終

末紫の雪三の巻

上野介藤原重名釋

○秋 三十九首

鷹ハえがや袷ハふところに入るよりまくれかくるものを秋にかけし清く
鷹をえがやに入るよりハ袷も無用(イラヌ)なれバその袷をも袋に
入しまゝ将に出べき秋をいつしかと待かくりしそのをそらや
秋になるしとよみしそ秋の初をむ○とよめる歌や さく
四ノ句にりのそのを文字めぐく早きみそ秋にありつるハと云ことに
なるや又ありつてハ鈴の縁の詞や鷹ハとやに入袷を袋に入る
とみを一ノ句のたる歌とのいへるハ入と云詞を入てみるべし上ハ入る やうな

濱臣云此歌誤字有べし

詞を略きしもの也

天河交野なるかりくらしてほしとやかへりけらしも

鷹司の下句を彦星とこそ古註に云ハおぼつかなき稀也と云

んかなといひしとせえくいとおもしろき類也天川も交野も河内

國の名所也そ此をも越えくいかたの御狩場也説のことハ天川

より彦星とまうけく彼天川のかたりにおく狩する人なれバ

世に云ふるにおかす事なる是下句の鷹人如く天河に縁ある

彦星とひろむとよそ説ひしもの也天川に世りしいふ

鷹道是下句の異名是彦星をとり合せたる趣意之交野ハ

天川にかへるをも也塙本に三ノ句のちを我やとし五ノ句を

秋の野に雪とちりまかふるむら鳥にあらはれ毛を掛ひ出は

古註に遠山に雪降しかゝる毛といひしそいかや遠山毛のるを云う

雪云ふまがふるとハ古註に云ふがごとく霙の類にて降来べし秋の

村鳥に雪などの思ひうけぞふりもまがふる時の秋鷹の遠山

毛を掛ひ出ると云のこと也塙本二ノ句雪を霧とかへまがふると

云詞かなを叶へれども説き綿毛の雪是ごとくちりてかハさらむや

あるかなしのみせし毛のちるさまをよんでて雪是ちるとうけ

合せし意来べし本居大平云雪をこちまがふるを霧立まがふる

来べしきりハこきりふとて矢の羽中にきりふと云があれバ霧に

なれ作じてもくゆるをきりふよこれらしくの趣意察べし西家
物語などよせにさいふるこゝろふの矢数ひとつと
巣打ハれ初鳥屋出しの若鷹をいふのみならずとりやうハまし
巣打鷹しハ寿也初鳥屋出しも秋也殊よ解よ不及ず也
鄙詞の事ハ前よ出たり
鳥屋出しれ一羽も去年の毛なきれ足革さして鷹おこる也
一羽も去年の毛なしとうけく無毛脛とうけしのよし也毛なし
そきこハ足れ毛なきにきをいふおこもハ鳥屋より鷹を出すを
出るをいふ又きゆる事秋鳥屋よ入るを寝るんゆく出すを
おこるを云うと君侯の羽ひき足ハ鳥屋よくして　毛挽

かけしるを云　搗本ゆき足を挽さしてと四ノ句ハかハまり
秋の来し方を忘れす去ふひろや夕への鷹ち西よ行らむ
古語よ云るがかく鷹を尋るよ由あへハ西をおもつねるとも云
侍み四方を以雲よ配をおつる時ち秋を西らん次ち此これハ
秋の来りし方ハ西なりハそれ西を去ふひろく夕へハ西の方へ
行らむとよみけるのミ行もいかく鷹も行べき方よ行ものぞ
西日よなきとハ西のかた夕へハおつれ故也古今集の歌ゆも西を
秋のちとよそられとよめり又鷹ハ本のもしる方を忘れぞといへぞ
本草を不忘て度ハをとるとと云んを示ろ〇ゆる成鷹し也
君侯のあひき

かゝりそめの此鷹のことさらにより白きやうさや此鷹来しむ
古語に云るがごとく諏訪の御射山祭に穂にて作る穂屋と云
ものありて此みさ山祭の年も神殿を鷹の穂にて作り
それ外人の家までも祭の頃には皆鷹の穂にて流ふるとぞ
此祭に遠笠懸を射て進らせる事は田村麻呂将軍
祈願により始る由社の縁記にありとぞ此祭は八月又七月
廿日とも廿七日なども といへり諏訪社の祭年中七十五度
あるよし夫木集金刺盛久をとれさくゝる事ぞまいりて乃
一むらにあり里ある杜それみさ山又慈鎮和尚鷹百首に
かりびとをとがめてしれのあるみさ山とりそめのかゑ鷹

扱鎌隼は羽さきに爪有と云名鷹なれども世に稀なるとぞ
なく諏訪の贄鷹にも備ることのとみへるなりかりてふくは鷹に
かゝる下の藤にもちらせとり又かり八刈と狩の詞なるとの
なりし良経公鷹三百首にも架まくて鳥とりゐぬきれたる羽を
おひをうけに野への鷹をひとさよしたちし北國にてハかこそをも
鷹と俗にもいひてめづらしくおもわと鷲をもとる也といへり
和名抄云鶻隼也贄鳥也大を祝鳩と名く和名波夜布佐(ハヤフサ)
又漢土の書に劍爪劍翮のなあれど双鶻と云劔鷙と云則
隼也とりに此類成べし
去年よりハ為海さりそうかくえてより出く來れ杖をうちしき

想ふく野山ゆかく一なる庵頼るを序へりとのみなる庵を序
なる庵しゆると云名来べし歌の意ハなる庵揃へまする鷹の
もとぞ猟猟ゆべき行末此秋さなるに哀れ悲しきと云れる
塙本にハ三ノ句をしゆるとみえて結句のかれしきをゆかし
きともに是よるくがりく意大よ異や野山の事にあらしだ
去年よりもなる庵慣れさるはしらかれればかり行べき秋さそ
うしとゆうしく思ふと云言よ来べし
山なるを更此けもしころとめて見えぬをけしる秋のさつ鷹
古註よけさるとも鷹ハころよ前なども遠見のころをいふやと
いふきいふく又二ノ句異本としるく更を雪としるく不審なるを

君侯の本又塙本ゆもまことあれバよくぞひもれく此方宜し
四ノ句二本ともよふくえるや又とえぬをとしていづれもけるると
そ此方よく字ゆれバ是よきくがひぬ二ノ句の梯ゆも渡るを
いふるかしぞハ不叶此かくられるるまよなき歌也
よしけ此かく門あれハ秋の来る為ゆや鷹の浄土あるまじも
古註よ浄土無義猶可尋とのみいふそいふぞ此歌のんまそ世
中に善悪てなき事強くいふ時さまらぐさし鷹を秋此
為よいふれバ其秋の来るを待く諸鳥をともに食ひあ
殺生をなる秋よ為の事しを云ハ若よ云がめしさてその秋ハ
為よ比るにそ此為ハ秋のなゆゆて鷹ハ秋よ殺生しくく是そ

鷹の為なれバ却て浄土とまをすなるらむの意也西方極楽浄
土と云事をかりしくとりなし説也
さて鷹の呼ぶのを手声にまねるハをちにひきてもあるやとなるらむ
をちハ遠也招し鷹を呼声の事にゆかりていづれも近く来
ねをとりて居るらむ是方にむかひでもよろこびくるらむとて鷹
人必手をたゝきてくさびしく呼よりもあれハや呼ふのを手声ハ小
声にてさゝく呼手をいふ又云を手声ハ呼声成べし をさき
手とも云も招餌なくこのをさきと云詞ぞ本居翁のうける
古事記傳十五廿丁 於是副賜其遠岐斯(此三字以音)八尺勾璁
鏡及草那藝劒云々 遠岐ハ書紀石屋戸段思兼神者
思慮之智乃思而自曰宜圖造彼神之象奉招禱也
ある招禱これ也又海神宮段風招と云事もあり風を招き
發を方や萬葉集十九巻二十七丁霍公鳥を待なげき月にしらし
日よりまさつ同十七巻四十六丁鷹の放るを招きよせんとする
まべのなき事を呼くよしれとこになされバとらんよなり後撰集
雑三歌為になきさなくらもし はしれしれ拾遺集物名の歌に
はしらんをまさ名をよせんともよめれ是等もをれ招寄するにいへ
あすらめるや乃まにせてこそや今ふりたとひに似る秋の夜の鷹
古語に云るがあく古鷹に似るるハその鷹の事也和歌にまる
座敷をせバいよくしらくなるらむと云意也外に義なし 壙本

又古寫本古來居と四ノ句をきるとよろしからん
ん中を入てみれとおつる鷹ハ我羽とへハやおちに移るらむ
結句のおちハ落るの落る事を云く遠ゆきあらバ合ハん
意なるを追行鷹のしきりをさるに元より鷹のかにハ入く
是非なるをもかさじとかに入く追とハみれどもなると鷹とはん
らびりくをくよりしつめ羽の小羽つゞひらバ大羽のつゞき
羽とみれバこれをいづもなるの落る事までとおも羽なるむ
のまゝや　堵本又君侯の本にハ大羽を小羽にとべだやとを
これなるバ又小羽に飛ハおくみえながらおそれの物柴
それ故君かくうけぞ落る事までみとそも吟ゆべし

なかゐれ右羽右羽つかふし　木蔭き林に山の下かさ
古註に逸物の羽づかひといへどさまで云べきにあらず唯
木蔭き山なれバ羽を彼方此方にかくしく木蔭き陰を
追ゆくさまをいへるのみや
林に山の木下狩をみるとし大のわかるゝをしゐゆてぞ志る
是ハこりなし木の中に脊子を入られバさせとハんえ任ども
大のわかるとそなるの足跡につらく穴屋をとりてフウくと
云をいふ　堵本ゆた二ノ句の狩を陰ともぞ此方も號ゆてん
ゆく紅ハ大のわかるゝそこてせこれてなるをかゝるをのみかゝるに
かけゆらもなき事ゝや

とさけびの義をこにあるし此秋のまる鷹人のいしぬふとも

古註にいふめぐるの多くさくとさけびハる時也 塙本

二ノ句にしきゆとまるをよろしかしげ

あらためのむらさきの茂る鳥の毛をふさたてゆく野の中の風

秋の花の風立ツ日の鷹狩のさゐぎりあへり也是ハ唯雲げと

いふく毛をつくろひぬく事也又是を鷹詞にかけ切ルといふ也

とりかへしおひし事也

秋の野にきぬをかくせる葛袴おちにきぬてとるハとりあれ

野の花ちきさハ萩に脛をさへ葛も秋の花ちのかく

葛袴ハ脛をかくせといふ也 をさへてとハ来りてと

袴を着てさきといふそへり拔れの事ハ唯鷹の脛ハ足也て

それ鷹の足をかくせる秋の野に生ける葛原なるにそれ茂れる

葛の中にゆくをとるを近付ク おちハ落かくとりとよみてかへし

ものやはらぐにうみゆるにみてかへかさ拔と云べし 又云此葛袴ハ

葛布をもつてつくる袴をいふ ちきさきちきさハ元より萩と脛と

をさへてさはるものから鷹の脛にあをつて鷹人の脛にかくを

いふべし葛ちる所をさはらる人の入野のさきは越えてくも

ゆくべきか

秋の野に花ちものしけきをも思ひつる人さへ鷹のゐるをとりて

古註によるをとりかへるに鷹をもとひわるるといふハよし人さへ也

いふを可尋といへる明らかならぬにや此歌のさまへの詞なりておぼく
くるゝ迄やゝ歌也秋の花が見へざりける鷹をかへる人是を思
ひ合るに手鷹なひのさ〆などして鷹とぞ見るをばとるべきに
鷹をそこなひき中より思ひあるをみればその思ひかへる
人さへ鷹の見るをとらまうけるとやさへの詞はなく萬葉
集などにて副兼の字をかなとそれ上といへるや或寫本是
二本には三ノ句を思ひかへるくとあり是もさてはえぬにはあらねどその
故は近比君侯の狩場にて鷹に挑まれし雁逃まどて或村の
中にかくれ居たりしを鷹も見かへく歩行(アリク)鷹人持ひらけを
手にそせしの中なる雁をとりし事是あるはかゝるたりは光に八

なれ共かづらまくらにある事とてよみ給ひしなりの策
然しさなくは何るくとしても見えぬにはあらざるべし　さへずて
鷹と人とも二つにかゝれる詞也
又ちれなく唯つよりと鷹人の邊は知るゝ秋是はのこの句
からなれる歌也然し秋の日是みどりまに又是ちれ手綺
とりて出ればやがてくるとや
秋の田にかるてふ稲のよみもあをとらむとや鷹よりかへるむ
古經に鷹の頬に紫色に成まで雀をよみくゑへはいはるや
とのいふを委しく見れば鷹も思ふとみといふなる思を
ムは好事也人見ていまだ食氣のつかぬといふなどの事也

むし雀ハ鷹の餌とする雀を手にてもむ時ハ雀の肉ハ血
締まるもの也むし雀の事鷹家にてハいろ〳〵口傳あれど
ことよし也又雀の籾に酔事ある鴨なども籾酔とていたく
酔時ハ飛事も不叶人にさへとらるゝ事もまゝあるなり
大食しつゝふさ（閉塞）くと云位の事也此歌の一二ノ句ハむし雀を云む
料にいへるなりかのむし雀のおもはたを思ふとみしくいやしきよ
まずるになりてやがて鷹にとられなく鷹にうつされなしむと
いへるなり又鷹ハ餌うとみする時ハかの歌に云如く雀銭
めして肉を和らげてうかゝハすを佳く此二つをうるをてきく
おしくよみ給ひて歌の句ハとしまへるなり一二ノ句ハ序ハ

せちにいひて秋田を刈比の事なれバ是もたゞしくおしく
まうけたるものなり

川ぞひにつなぐ筏のくさ鷹ハ田面はなるゝにあらひてぞある

古語に鴨鷹のん也と云ハいつも鴨をとるハ大鷹の職なりと
云事なり今ハ大鷹に不限也さて語に云る筏とハ水中にて
取たく羽にて糸を切つて投のごとくとりし鴨の上に柔く首に
出事を云此歌のんき首につなぐ筏の組とくる事組ハ首を
つなぎ組なるんにゆく軍語に組卧してみても同じくて鴨筏
こゝしきてその鴨に柔く首につくされを田面にてとりし
たるに思ひてとりつゝやがて首につなむとする鷹ハさこのかし

こゝろをよく得ひしものや水中にくゞるをとりて水中とゝも
抑もかく四面にくとりしるになしひく水中にても猟に
平気にく飛ると云ことなりし文化十二年十二月三日の狩に
時にもわく下毛郡蔵人の池と云池なる鴨をとりしなる
重名も親しくみんしありて此鴨の鷹の形容をよく
又かしこき鷹のことくを知るや或鷹書に鷹の鳥に乗て
捉かゝるゝ鳥をる車に乗ゝると云ことをかくも
たしかなる此飛ぶとる雉の落たありもきつけかゝる犬の形
古語に鷹ハつくそる升落る事也とつるね犬を鼻付ぬ
るとやと云へるハかゝりけど鷹の雉をとらへ雉から草の中に落

た隠れくひさなせに即ち隠も得く鷹ハその木に木乃
枝に木居とりて庭にかけ犬の草乃中より雉を追出さむと
すれども雉の足跡も不知唯むしに帰らくかられ居ハ犬も鼻捻
つめて追出し事の叶はよく猟へるやさらく犬をみるを
云へぬを庁に知りとらく鷹をもやがて云ハ知べくともあれ
云るにお鷹と鷹匠人の名をかゝる時に犬前足を折らく座りも
知へ木居をもちにて知りと云かゝる犬ハいと怖なりけのやまの二ハ
幼犬にく鼻きゝかぬるものとぞ塙本にて君の額に入るく
二ノ句雉を推とあやまれる跡のこえてもしるらハ木居とり
雉もその中に落ちたりし犬も君のこと犬にく鼻つけかね

るといへるなるも
さるを世も狩にとりもちゐるはいかなれば日次のみならずいつの御代よりも
古語に諏訪の御狩に午未の日を用ひされバ平人の狩も
此日を除く日なれバ日つぎといふとハいへど此日次ハ日ならずと
よみなく唯朝廷に日毎々々に献る御贄の為に狩をとめなく
なる狩ハいつれ天皇の御代よりも始まりしとしるや諏訪の
事をとり出ていふべき事にいはじ慈鎮和尚鷹百首に
百しらね日なミの鳥をとらそむともかくともなるも塙本にて此
歌をおしへて西園寺公経公の百首中にも出せり日なミと
日並びとなく毎日とよむがめし朝廷の日貢也いかにへハ禁

野ありて日々奉れる贄也又まうけたる飼ひて禁野に其所を預
りて鷹をつかふものなりといひし鷹を好む人これをならひて
つかひし也古代ハ公家なるく鷹を好ミ給ひし由嵯峨物語にも
書に出後普光園院摂政良基公の作也後小松天皇至徳三
年にかき給ひし由奥にあらはせり又此書中に近代鷹を好む
人とくに好ミ給ひしは西園寺相國公経公常磐井大政大臣
實氏公入道相國實兼公也入道相國ハ鷹の雉なくしては
不食のよし承る及ぶとこそ見えたれ此比までは朝廷日並の
贄日々奉りし事知べし至徳三年ハ四百三十年あまりの
むかしなれば源平の乱よりハさるから後の事とさくたへ鷹を

なる爐より火を時著を焚く火也と云事のあれバ上ノ三句ハよると
頭へるとのうちをとりて夜居に鷹を据ゑてたゞるけふまて
日おちれ御狩の為めかしく此は八川れ御代よりの事
なりとよめる成べし

駒

は花おく小田のかえぞれうらゝうとに鷹まなるを見そまよそなもし扉
古註にかくらつて不知可尋とも是ハ唐鞍の類にて唐轡
成べし又古註にたうかるの事やと云もくはしき扱はうかるまで
彦臥ぞかるを云此駒を馬上の鷹猪の駒なれバ駒と云唐
河をとらく小田にある捻参とうけ参にあるを辛（カラ）とうあるを
此四ノ句のにぞ文字五ノ句のにぞ文字にさりてゆかくし塙本にて

むとをよろし可従二ノ句をほとゝとせるハよしなれど狩をさく
駒を草を喰とのするれバ下にたるとなび上ノ句ハ唯鷹人の唐轡
かけし駒に乗く下ノ句ハ駒より合せ出し鷹の草れ中に入て
鳥をとらむしに肉を駒のくらむ草のかく食といへるのこや四ノ句も
とりる方にへ従し又武用辨略に唐轡ハ甲州山中鷹の巣也青
宇治の寶蔵の唐轡を七月七日捜物の時鷹の捉く山中れ
巣にあるものにの鷹甲斐國より献するの名也是より甲州
鷹の別称とも云下略かくる故事もあれバうらうられ
事りくしく都りしろさ取合せ成べし本居大平云駒つれく
小田のかえそハ夫木集駒の歌に 源仲正 たゝやよれ河のぬなそ

つなかれて汀をはなれぬつる舟の綱又弐歌めも又川を離る
其の歌ハつなかれたるところもさしね離れの方の綱など
如く若みべし扨此歌を穂参につなかれたる也又を結ぶ歌く
結とてかくて小田とつけかる方もあるべし結句の字ナリ
其もつ離をかくへにそもかんなるべし鷹も多を以てそもも也
綱も索を以てそもも也
秋の日を唯一にはかられぬべし以てとしもあきなみを長もとも
隠れたるなとも見えるなり秋の日を経たるもなくわれをも也とも
よろけたるなり也経なハ八分あまりて遣索(ヤリナハ)をつかふとも也塙本なを
三ノ句かれにかりかへ也たるなハ弐八揃索(サハキナハ)とも揩索とかたあ

牽(ヒキ)索の事也
隼を二つなかてそおハせつる鳴る川の々此秋のつらにぞ
此歌を古今集旋頭歌に初瀬川ふる川のへに二本ある
杉としをへて又もあひ見ん二本ある杉といふを本歌なる
よし歌ひしものや其歌の又もあひ見んも鷹綱にかゝるに
いと惜しく思われハ鵜く立つもの中へきたるを喰ひてくるべし
古語に唯川をつらつに二つ鷹とくらひとのといひてくるべし
塙本かて二ノ句の趣をかとまれとよりしりたし龍山公鷹百首の
中によそせるむかしの房にふくろ鷹すゑとりそしくあらぬ
隼さてころとりとて面くに二つ清くるをとるとかに又大鷹小八

あはとりと云事なく鷹一つなく爰に二つあるをいふ
鶴の二捉ハとりてとりやと云し鷹に書なとくさくの説も
あれく口傳のよしいふ
落草の末にあられぬ秋の野にとりとる鷹のまへにもとしぬる
古註に為る九鷹不知可尋之といふをいへど是ハ草の中をくぐる
ありたくなるを鷹に草ごもりつむと云使く下ノ句の又もとしぬ
つゆにまみれしかも志られぬくまぐ離れぬ深草に草むし此中なれバ
為る草の中をくぐれくあまりてと迷れんとするを鷹のとらむ
やしくとりえぬさまをよみしのとりあるの網とかさねたる
歌の句ひや下ノ句又もとりそこなひしと思へんや志らぬれし

ぞよむ。ありハと云んとも二三ノ句にふくめてあるなり
爰らひハ七月まで此初鷹場を見るのりよしもこの那
古註に初句不知と云をいろいろ爰らひハ爰らかなる也 鳷(バン)方目とも
練雲雀鶉の類をとるをなる也 歌の意ハ爰らひて鶉せし
まざも九月比までぞ初鷹場と思ふに今ハ全く秋の時分
なればバ南へ引く雁の類此為るなくもなく来れがしや
鶉によんなるもがなハ羅網也 擶本にも初句の此の字をくと
しく結句のひくをもくとすれどもよろしからん
秋山のみとり此鷹の依あちやかくちの織れるかさ鞘む
古註に緑丸と云鷹やと云何の書にも見えるなかるる又

濃州北山兄鷹の事しやといふも何によれるにかあらん不詳又紫
草にも装束付るとも、みち装束錦装束ともいふ也とも云を
此鷹をみとりといふ詞によりて下のたみちにかけてしるして合せ
られる也古註に鈴をもちそへて上毛の上に鈴かくしとて小さね
二つあることゝ云是也壋本にハ二ッ句をひとかりの鷹と見られてあしく
本居大平云或書にのせたるくさぐさを鷹をはなちやりて
みどりなるぞ思ひはへるとあるも見鳥とて鷹の道ハさもあるべし
鷹ばかりのことも兄附るやうとて見るれとも云のハあらし此大平説
説ともうらし思ひあハせて考ふべき事とも也又或鷹書
みとりの鷹をみぬとしといふをもてうつゝにしくらへしの鷹

たぬきをと云とせるもとりれ鷹と云詞引合せ考ふべきにや
をみちせる摘のゆゑなる者のあつとりてあつかれ鷹にうつるも
古註に人の小便に餌をひたしく飼をいふ也せうしまりや也
云も近世にハかゝる穢をきらひて多く不用いろゐる者のみ水へ小便の
異名にくもなるべしおほく此集に柿と云事れ出しいたるも
今かしむつかしく字田依て考るに此うたハ柿のたみちせ杖の
かれなれバその柿れ葉のたみち深る所をふまえて詠めるにや
垣の本垣根にくその垣の内なる事などと結ひしてあるのをうたへり
をみちをかれわつかにうけるを小便も垣の内に縁をもて字田
此集の下にたとのうたれをとりつけよめるハ古郷の垣といひて

榾をとりならべ柿の事をよみし歌三首あり然れどもむかし
しまりを用る事ハ鷹肉肥る時ハ鷹匠のいましめをまもらバ
ら八肉肥たるも肉さへよく時ハよくなるをとるもの也

霜

さゆる野べはふくふる葛葉ハえる露への也やかた尾の鷹
やかた尾ハ杉府とも云或鷹書に屋形尾と云ハ數十二也
府ハ八文字に立る也と云も歌の意ハ霜さゆる秋の末野から
めぐるる風さへ吹ところ真葛葉ハ風に吹かへされ日かれバ
名残惜くて夕ぐれなかく岡なる舘へ帰るとある也名残
やるこころ歌よ詠ても然く葛葉のうらみなどきこえたる
葛葉にてうら白くて吹風にかへくうらくらる名残の心細き

然なれバかへるさしるけれど多くた歌よもよめるも
はなもかれ名をのこりハ八重羽は野よみるもきれいかなりまして
古語に禁野に八重つ羽の重なる雉ありと云ハ鷹の書に
文德天皇の御代惟高親王河内國交野に狩し給ひ在原
業平朝臣も供奉し給ひ八重羽の雉子出しこの雉ハ羽劍の
ごとくなるとも又三足の雉子ハ事ともいへりと云此事ハあしかる成
國史にもえらぬ事なきやいづれも八重羽の八地名のあるう
事えらくとこちの霧とう事霧ならも又八重とまうけし
のこ葉べしさなどハそれなくとこゑぬし哦なり畑れ
野べよみてかもうもくらしありやと云のこ葉べし

しかるに秋のやまべのちしらぬ日かけの毛さへぬれつゝそよく
古語にはかゝの毛を云といへど秋はしられ行時もあらさる
ねの鴇はさゆをいへるなり
なるを、つゆのさゆまつるけしきをとめうしかへる秋のふかき事
古語にあつきたる鷹とのこえたるかし凡此詠土下の句を
たちひはしくまうけしる詠也是ハ此鷹ハいつもなるをよく
とりまくあらせやるあまよ逃さずまつる此鷹のたよハいぬる
りぞくへつまく平生鷹そむきく鷹る人のとまもめづらしくのとめ
詠るよのえうしかひさくいつやもとん附ざる秋の山陰といへる
のこともかハもとめの上略也やがて詠る事よ成や古今

集よ巷の屋根山の岩稜をとめくおちるとよみしも既
かしれ岩風をとらへ傍ひて落る事也
なる尾出るうち毛の鷹よのこゝる羽也去年はあつふのあかりぬれん
片毛とハ片鳥屋の事を云くなる尾をバ一なる尾よむとも云
今年出れる鷹は末年の夜なる尾をしらく又翌年ゆ
でれ夜なる尾をとるまでを片なる尾と云人のこゝにそいぐ
まづ出る時を正月とし毛正月ハ八十八夜也此鷹翌
年の夜までを諸鷹といふ毛をかりしく仕舞を片
なる尾と云ならも
あらたの鷹よかゝるをうちのけくさゝきとしかる野辺のうま人

鶉くるをとらむ爲に鷹にかくる事ゆゑに教へよく又それを追ふ
教るものなるゆゑに縄のさきにつなぎをやがて捌（サハキ）と云
このさぐくらを出し詞來べし長さ蒼鷹（オホタカ）の時は一丈
二尺或ハ五尺とも末を細くすべし藁に苧をまぜてこし
らゆる是もその流義ここに依て長短あるよし鷹の
書にいへり

秋ちかくかりにうつしれ小山田のいなばもそよとかるもつなの鷹
初句塙本又君侯の本にありて秋ちかくとし此方よろし近くと
あるまて全くおなじまるにも君侯の本結句かりつなの字を
まるハかく秋ハ字中も縁なきくハ此ゆゑさらく歌のすきハ秋

みな刈のこしたる稲ある小山田と上ハ本にかへいはく
られしく秋はおしも稍つなくかく稍しくるとええ詮
捨よとて古歌に多き詞なく竹笹稲葉などの風に
戦（当）くよふも出し詞なく多くそれなど詞をうけたるを
みててよみし歌多しいぞそよ人を忘れやハせるなど
よみしも同しこともあるもそれなとはいふをうつりかり
つなさて鎌なく刈つなのこしたるすなわしを鷹に人の稍つなく
鷹うけそれと云ん來へし

秋の野は尾花のかくをさきそてたてる兎を鷹やかりなん
尾花をなすよ見へねつるも古歌に多し兎を彼り縁

わざバかりく拵ひ合せて鷹の兎を追てありしなり

又大鷹の兎をとる事ハ元より案のうちなれバいと易く

よみなし給ふなる也

末紫の雪三孔巻終

国立公文書館
National Archives of Japan